二十八　山里は　冬ぞ寂しさ　まさりける
人目も草も　かれぬと思へば
源　宗于



冬

〈声に出してよんでみよう〉

ヤマザトワ　フユゾサビシサ　マサリケル
ヒトメモクサモ　カレヌトオモエバ

＊語頭以外のハ行の文字、つまり語中・語尾の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、ワ行音「ワ・イ・ウ・エ・オ」でよみます。[1]助詞の「は」も、現代語と同様、「ワ」とよみます。

〈どんな意味だろう〉

山里は、冬こそ寂しさがいっそう増すのだなあ！
人目も離れ（＝人の訪れも絶え）、草も枯れてしまったと思うと・・・！

＊「**ぞ**」は、強意の係助詞です。この語が文中に用いられると、文末は連体形[2]になる、という文法上の規則があります。これを、「**係り結びの法則**」と言います。[3]第三句末の「ける」は、詠嘆を表す助動詞「けり」の連体形です。したがって、この歌は第三句が文末で、ここで切れることになります。このような歌の構造を「**三句切れ**」と言います。三句切れは、第二・三句の「七・五」の部分がまとまることになり、「**七五調**」と呼ばれるリズムを作り出します。七五調は、『古今和歌集』（九〇五年頃成立）の時代以降現代に至るまで、日本語の韻文の一般的なリズムとなっています。

＊第四・五句は**倒置**されています。倒置とは、通常とは逆の語順で表現することで、最も強調したい部分を先に述べる技法です。

＊「**かれ**」には、「（人目が）**離れ**（＝人の訪れが絶え）」と「（草が）**枯れ**」という二つの意味が込められています。このように、同音であることを利用して一つの表現に複数の意味を持たせる和歌の修辞技巧を「**掛詞**」と言います。掛詞には、三十一音という和歌の限られた形式の中に、重層的な意味を持たせる効果があります。

〈解説〉

日本の詩歌では伝統的に春と秋が好まれ、多くの作品が作られて来ました。これに対して、夏と冬はあまり人気がありません。そのような中で、この歌は、秋の寂しさを詠む数々の歌に対抗し、冬こそ寂しさがまさるのだ、と切り返してみせているわけです。人の訪れも絶え、草木も枯れ果てた、何もない、凍てつくような、身を切られるような冬の寂しさ。作者はここに、新しい美意識を提言しているのだ、とも言えるでしょう。また、政治的に不遇であったと言われる作者の、心象風景であるかもしれません。



つらら

〈作者と出典〉

作者の**源宗于**（?～九三九）は、光孝天皇（→「十五　君がため春の」）の皇子・

是忠親王の子。つまり、もとは皇族だったわけですが、源の姓を天皇から賜り、臣下の一員となりました。このような人物を「賜姓源氏」と言います。源融（→「十四陸奥の」）も、また、『源氏物語』[4]の主人公・光源氏も、賜姓源氏です。賜姓源氏の中には、血筋の高貴さから政界の中枢で活躍した人物もいましたが、皇位継承権を失ったことなどから不遇の身となる者も少なくありませんでした。

この歌の出典は、最初の**勅撰和歌集**（天皇の命令で編集された和歌集）である**『古今和歌集』**（九〇五年頃成立）です。

---

1 ハ行の子音は、八世紀頃[p]から[ɸ]（現代語の「フ」の子音）に変化し、やがて十一世紀頃、前後を母音にはさまれた語中・語尾の[ɸ]が[w]と発音されるようになりました。なお、[ɸ]が[h]（現代語の「ハ・ヘ・ホ」の子音）に変化したのは、十七世紀頃と推定されています。

2 「**連体形**」とは、活用語が体言（名詞）に連なる時の形です。古典の活用語では、文末で文を終止する時の「**終止形**」と「連体形」とは、別の形をとるものが多かったのですが、現代語では、ほとんどが同じ形になっています（「な形容詞」だけが例外で、文末では「〜だ」、体言に連なる時は「〜な」となります）。このため、留学生の皆さんが教わる日本語教育文法では、両者をあわせて「**辞書形**」と呼び、一つの活用形として扱っています（但し、日本人が学校教育で教わる「国語」文法では、古典文法とのつながりを重視するため、現代語でも「終止形」「連体形」の二つの活用形を立てています）。終止形・連体形の区別がなくなったのは、文末に連体形を用いて余情・余韻を残そうとする「連体形止め」の技法が一般化したためで、十四世紀頃にはこの変化がかなり進んでいたと見られています。

3 「係り結びの法則」は、終止形と連体形の区別が失われたこともあり、十四世紀頃にはかなり衰退が進んでいたと見られています。

4 平安時代中期、一〇〇〇年頃成立した物語。日本古典文学の最高峰とされています。作者は、紫式部（→「五十七　めぐり逢ひて」）です。